

ライフステージ、ジェンダー、ワーク・ファミリー・コンフリクト －ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因と生活の質との関連－

西村 純子
(明星大学)

Life Stage, Gender, and Work-Family Conflict
- Determinants and Relationship with Quality of Life -
NISHIMURA Junko

家族領域と職業領域にともに参加する個人について、双方への参加によって時間や労力の配分に困難を感じているかを把握する概念として、ワーク・ファミリー・コンフリクト (WFC/FWC) がある。本稿ではNFRJ03データを用いて、WFC/FWCの発生頻度、規定要因、および生活の質との関連について、ライフステージと性差に注目して分析を行なった。分析の結果、全体としてはWFCのほうがFWCよりも発生頻度が高かった。WFCは男性に高く、FWCは女性に高かった。ライフステージ別の発生頻度を比較すると、WFC/FWCとも、男女ともに「末子0-6歳」のステージが最も高く、子どもが成長したライフステージにある人ほど、発生頻度は低くなる傾向がみられた。規定要因については、WFCは性別・ライフステージを通して、労働時間が長いほど高い傾向がみられた。FWCは家族要因とはあまり明瞭な関連を示さなかった。WFC/FWCと生活満足度との関連は、ライフステージによって異なり、また同じライフステージにおいても性によって差異がみられた。女性の生活の質は、ケア役割の重さによって生じるWFC/FWCによって左右される。一方男性の生活の質は、ケア役割とそれによって生じるWFC/FWCには影響を受けていないようだった。むしろ経済的役割の重さや余暇生活の一部としての家族生活が職業生活と相容れないことが、男性の生活の質を左右している可能性が高い。

キーワード：WFC、FWC、生活の質、ケア役割

1. はじめに

家族生活と職業生活は、現代社会で生きる多くの人々の生活をかたちづくる二大領域である。ワーク・ファミリー・コンフリクトは、その二領域を往復する人々がどのような経験をしているかを把握しようとする研究者らの注目を集めてきた概念である。Greenhaus and Beutell (1985)によると、ワーク・ファミリー・コンフリクトは、「仕事と家族領域から互いに相容れない役割プレッシャーがかかる役割間葛藤の一形態」と定義される。つまりワーク・ファミリー・コンフリクトとは、職業領域と家族領域にともに参加する個人について、双方への参加によって時間や労力の配分にその人が困難を感じているかどうかを把握しようとする概念である。

ワーク・ファミリー・コンフリクトへの関心の高まりの背景のひとつは、現実に家族役割と職業役割の両方を担う人々が増加してきたことにある。日本では結婚や出産・育児で就業を中断する女性が依然多いものの、育児がひと段落したと思われる40歳代の有配偶女性の労働力率は約7割

(2004年労働力調査による)である。また性別分業意識が流動化するなかで、男性が家族役割を担うことへの期待も高まっている。家族役割と仕事役割にどのように折り合いをつけるかは、男性にとっても無縁の問題ではなくなっている。

こうした社会的背景のなかで、ワーク・ファミリー・コンフリクトが家族領域と職業領域に同時に参加する個人の経験を把握する概念として重要性を増している。こうした状況は、理論的にはストレス研究において、家族生活と職業生活における個人の経験を統合してとらえようとする動きと一致する。Frone et al. (1992)によると、従来家族生活と職業生活はそれぞれ別々に研究されていた。しかし労働市場において、幼い子どもをもつ有配偶女性・シングルペアレント・高齢者の介護に直面した人々が急激に増加したことによって、家族生活と職業生活のインターフェイスに注目が集まるようになった。そうした関心は、2つの研究課題を引き出した。ひとつは仕事と家族のストレスの個人のwell-beingに対する相対的なインパクトを問うものであり、もうひとつは、well-beingに影響を与えるストレス源としてワーク・ファミリー・コンフリクトを問題にするものである。本稿は、このうちの後者の流れをくむものである。

ワーク・ファミリー・コンフリクトに注目することには、以下のような利点がある。すなわち、ワーク・ファミリー・コンフリクトを仕事と家族領域を結ぶ媒介要因として位置づけることによって、仕事・家族要因が他方の領域あるいは生活の質に影響を与える道筋を明らかにすることができる。例えば、労働時間や仕事の中身などの仕事要因は、ワーク・ファミリー・コンフリクトを経由して家族生活における負担を増大させているかもしれない。逆に子どもが多いことや介護の必要な親がいることなどの家族要因は、ワーク・ファミリー・コンフリクトを発生させ、それによって仕事のスムーズな遂行がさまたげられるかもしれない。また、そうした仕事・家族要因によるワーク・ファミリー・コンフリクトの発生は、個人の生活の質自体に影響を与えているかもしれない。ワーク・ファミリー・コンフリクトをあいだに位置づけることによって、家族と職業領域とが結びつく道筋、家族および職業要因が個人の生活の質に影響をあたえる道筋を描くことができるのである。

さらにワーク・ファミリー・コンフリクトを介した家族領域と仕事領域との結びつき、また家族および仕事領域と生活の質との結びつきは、個人の社会的位置によって異なっていると予想される。そうした結びつきの差異を記述することによって、個人を構造化する「社会」を描くことができる。ワーク・ファミリー・コンフリクトはすべての個人に同じように経験されているわけではない。またワーク・ファミリー・コンフリクトはすべての個人の生活の質に同じようなインパクトを与えているわけではない。それらは、家族および職業生活において期待される役割、またそれらの個人にとっての相対的な重要性によって異なっている。家族領域と職業領域は、すべての個人に対して同じような時間・エネルギーの配分を期待しているわけではない。その差異を記述することによって、社会がすべての個人に同じように生きられているわけではない、つまり社会が個人を構造化する側面を照射できるのである。

2. 分析の視点と仮説

ワーク・ファミリー・コンフリクトは、近年ワーク・ファミリー・バランスというより広い概念の一形態としてとらえられている (Frone 2003)。つまりワーク・ファミリー・バランスには、コンフリクトと促進という側面がある。そしてコンフリクトと促進のそれぞれについて、仕事が家族へ影響を与える側面と、家族が仕事へ影響を与える側面とがある。結局ワーク・ファミリー・ balan

スには、4つの側面がある。本稿で注目するのは、このうちのコンフリクトの二側面であり、仕事が家族を妨害する側面（以下、WFCと示す）と家族が仕事を妨害する側面（以下、FWCと示す）である。

またWFC、FWCには、時間ベース、ストレーンベース、行動ベースの3つの形態があるといわれている（Greenhaus and Beutell 1985）。NFRJ03におけるWFC、FWCの質問項目は、「仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと」、「家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと」となっており、時間ベースのWFC、FWCを測定している。

本稿ではWFC/FWCの発生頻度、規定要因、および生活満足度との関連について、特にライフステージと性による差異に注目した分析を行なう。先行研究の多くは、ライフステージを限定したサンプルを分析したものか、幅広い年齢層をひとまとめにして分析したものがほとんどである。しかしWFC/FWCの発生頻度、規定要因、および生活満足度との関連は個人のライフステージによって異なりうる。なぜならWFC/FWCは、家族生活および職業生活からの要求の大きさ、個人にとっての家族生活／職業生活の相対的な重要性によって左右され、これらの要素はライフステージによって大きく異なると考えられるからである。また女性に家族役割を担うことが強く期待されている日本社会においては、当然ながら同じライフステージにあっても、WFC/FWCの発生頻度、規定要因、および生活満足度との関連は、ジェンダーによっても異なっているだろう。

以下では、WFC/FWCの発生頻度、規定要因、および生活満足度との関連についての仮説を提示したい。

まず、WFC/FWCの発生頻度についての仮説を提示する。WFC/FWCは、仕事および家族生活から同時にプレッシャーがかかるときに最も発生しやすいと想定される。こうした観点から考えたとき、女性に対する育児役割への期待が大きいこと、育児期に就業している女性は比較的職業役割に強くコミットしていると考えられることから、女性のWFC/FWCは、育児期に最も高いと予想される。一方男性については、職業役割からのプレッシャーは若年～中年期に高まり、高齢期に近づくにつれて小さくなると想定される。家族役割への期待は、性別分業意識の動向などからも若年層ほど強いと想定されるため、男性のWFC/FWCも育児期に最も高いと予想する。しかし家族役割への期待は女性よりも相対的に低いため、WFC/FWCの程度は女性よりも低いと予想される。

次にWFC/FWCの規定要因についての仮説を述べる。本稿で問題にする時間ベースのWFC/FWCを規定する要因は、それぞれの領域における時間的プレッシャーである。すなわち、WFCについては、労働時間の長さの効果を検討する。FWCについては、子ども数、親の手助けが得られるか／年若い親の世話が必要か、自分の家事負担の程度などを考えることができる。日本における先行研究では、労働時間が長いほど（／仕事時間関与が高いほど）WFCが高まる傾向が繰り返し確認されている（斐 2005；金井 2002；杉野 2004）。一方で、家族要因のFWCに対する効果は、男性のみ、家事時間の長さがFWCを高める効果が確認されてきたようであるが（斐 2005；金井 2002）、その他の要因については、あまり一貫した分析結果はみられていない。本稿ではこうした要因の効果は、ライフステージや性によって異なっていると考える。すなわち、こうした要因の効果は、WFC/FWCの発生頻度が高いライフステージや性において、より大きいと予想する。なぜなら、仕事と家族の双方から強いプレッシャーがかかっている状況下では、WFC/FWCは仕事要因や家族要因の少しの変化に反応しやすいと思われるからである。つまり時間的に余裕のないなかで仕事と家族生活のやりくりを行なっているときには、例えば労働時間が少し長くなるだけで、容易にWFCが発生すると推察される。

最後に WFC/FWC と生活満足度との関連についての仮説を述べる。WFC/FWC が生活満足度に関連するのは、家庭生活と職業生活とのバランスの問題が、個人の生活のより重要な部分を占めるときである。こうした観点から考えたとき、WFC/FWC と生活満足度との関連は、子どもが小さいライフステージで強く、子どもの成長とともに関連は弱くなっていくと予想される。

3. 方法

3-1 用いるデータと分析対象

分析には、NFRJ03 を用いる。分析の対象とするのは、調査時点で 60 歳以下で就業しており、子どもをもっている有配偶者である。

3-2 分析に用いる変数

従属変数は WFC/FWC である。調査票においては WFC は「仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと」、FWC は「家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと」という質問項目でたずねている。これらについて、「何度もあった」= 4 点、「ときどきあった」= 3 点、「ごくまれにあった」= 2 点、「まったくなかった」= 1 点と数値化し、それぞれの合計得点を WFC、FWC の得点とした。

仕事の時間的プレッシャーは、月あたりの総労働時間を用いる。家族の時間的プレッシャーについては、子ども数、親（父母・義父母のいずれか）との同居（隣居も含む）、本人家事頻度（男性の場合）、配偶者の家事頻度（女性の場合）を用いる。

親との同居は、おそらくライフステージによってその意味合いが異なることには、注意が必要である。子どもが幼いライフステージにおいては、親との同居は育児のサポート源としての意味をもつ。したがって親と同居している場合には FWC の発生は抑えられるだろう。しかし子どもが成長したライフステージにおいては、親は高齢になっており、親との同居は、年老いた親の援助にたずさわることを意味する。ゆえに親との同居は FWC を発生させやすくすると考える。

本人の家事負担を測定する変数として、男性の場合は本人の、女性の場合は配偶者の家事頻度を設定した。これは現状ではほとんどの女性がほぼ毎日家事を行なっているため、女性について本人の家事頻度を設定した場合には、分散が小さくなるためである¹。むしろ夫の家事頻度の分散も全体としては小さいが、女性が夫によってどの程度家事のサポートを得られているかを測定する変数として、女性については配偶者の家事頻度を設定した。

生活の質については、生活満足度を用いる。これは調査票では、「現在の生活全体にどのくらい満足されていますか」と質問されている。この質問に対し、「かなり満足」= 4 点、「どちらかといえば満足」= 3 点、「どちらかといえば不満」= 2 点、「かなり不満」= 1 点と回答を数値化し、その合計得点を生活満足度の得点とした。

3-3 分析方法

分析は、二段階に分けて行なう。第一段階では、ライフステージごとの WFC/FWC の発生頻度の比較を男女別に行なう。まずライフステージごとの WFC/FWC の発生頻度を男女別に図で確認し、男女

¹ 分析対象者の女性の本人家事頻度の分散は 9.40、標準偏差は 3.07、男性の本人家事頻度は分散 15.02、標準偏差 3.86 であった。

別に一元配置の分散分析で、ライフステージごとの比較を行なう。また、各ライフステージで男女間に WFC/FWC の発生頻度に有意差が見られるかどうかについても、一元配置の分散分析で確認する。

第二段階では、WFC/FWC の規定要因および生活の質への影響について、パス解析を行なう。分析はライフステージごとに男女別に行ない、ライフステージによって/性別によって WFC/FWC の規定要因に違いがあるかどうか、また WFC/FWC と生活の質との関連に違いがあるかどうかについて検討する。

4. 分析

4-1 分析に用いた変数の記述統計量および相関係数

表 1 は、分析対象者の特性と、分析に用いた変数の記述統計量を示している。

表 1. 分析対象者の特性と用いた変数の記述統計量

年齢	平均 45.52 標準偏差 9.25
ライフステージ	末子 0 - 6 歳 (n=914)、末子 7 - 12 歳 (n=583)、 末子 13 - 18 歳 (n= 587)、末子 19 歳以上 (n=1181)
WFC	平均 1.91 標準偏差 1.04
FWC	平均 1.34 標準偏差 0.70
生活満足度	平均 2.22 標準偏差 0.66
労働時間 (月あたり・分)	平均 10977.72 標準偏差 4180.93
子ども数	平均 1.93 標準偏差 0.92
親同居	平均 0.30 標準偏差 0.46
本人家事頻度 (男性のみ)	平均 16.01 標準偏差 7.86
配偶者家事頻度 (女性のみ)	平均 14.09 標準偏差 8.09

分析対象者の平均年齢は 45.52 歳である。本稿では、ライフステージを末子年齢によって区分し、末子 0-6 歳、末子 7-12 歳、末子 13-18 歳、末子 19 歳以上の 4 カテゴリーを作成した。それぞれのカテゴリーは、末子が就学前、末子小学生、末子中高生、末子高校卒業以上の年齢と対応している。WFC と FWC の平均値をみると WFC のほうが高い。これは、FWC より WFC のほうが平均して発生頻度が高いことを示している。

次に表 2 で、パス解析に用いる変数の相関行列を示す。

表 2. パス解析に用いた変数の相関行列

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①WFC	1							
②FWC	0.367**	1						
③生活満足度	-0.137**	-0.158**	1					
④労働時間	0.271**	0.002	-0.006	1				
⑤子ども数	-0.022	0.039*	-0.052**	-0.068**	1			
⑥親同居	0.028	0.031	-0.018	0.040*	0.120**	1		
⑦本人家事頻度	-0.140**	0.063**	-0.028	-0.534**	0.064**	-0.050**	1	
⑧配偶者家事頻度	0.106**	-0.069**	0.032	0.530**	-0.005	0.007	-0.903**	1

注：*p<.05, **p<.01

表2をみると、WFCとFWCは比較的強い相関を示していることがわかる。ただし相関係数の値は0.367であり、WFCとFWCは比較的強い相関を示すが、まったく重なる変数でないことも確認できる。

4-2 WFC・FWCのライフステージ間比較

図1と図2はWFCとFWCの得点を、ライフステージ別・性別にプロットしたものである。

図1 WFCのライフステージ・性別の平均値

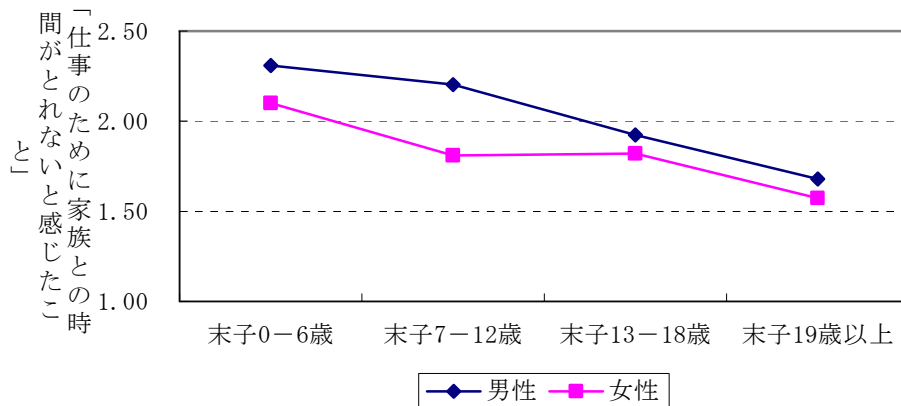


図2 FWCのライフステージ・性別の平均値

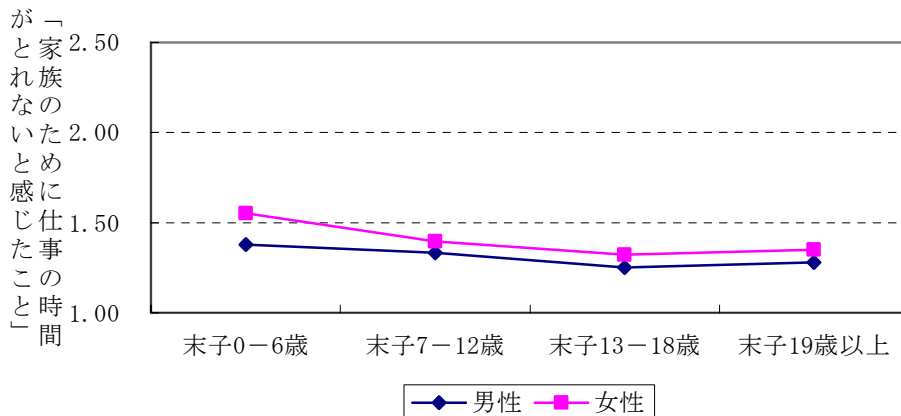


図1をみると、男性・女性ともWFCは「末子0-6歳」で最も高く、子どもが成長したライフステージほど低くなっていることがわかる。また、女性よりも男性のほうがWFCが高いことがわかる。同様にFWCについてプロットした図2でも、男性・女性とも「末子0-6歳」で最も高く、それ以降のライフステージでは徐々に低くなっていることがわかる。また、FWCについては、それほど明瞭な差ではないものの、男性よりも女性のほうが発生頻度が高い傾向が読み取れる。

図1と図2を比較してみた場合、FWCよりもWFCのほうが全体として高いことがわかる。

こうした傾向を統計的に確認するため、一元配置の分散分析を行なった。表3および表4は、一元配置の分散分析の結果である。

表3をみると、ライフステージ間の差は、WFC、FWCとも男女ともに有意である。平均値をみるとWFC、FWCとも男女とも、「末子0-6歳」が最も高い。

表4をみると、WFCについては性別による差は「末子13-18歳」を除いてすべて有意である。FWCについては、「末子0-6歳」を除いたステージでは、性別による差は有意ではない。

表3. ライフステージによる一元配置の分散分析の結果

	WFC		FWC	
	男性	女性	男性	女性
df	3	3	3	3
F 値	30.42	12.79	2.40	3.90
p	p<.01	p<.01	p<.10	p<.01
平均値				
末子 0-6 歳	2.31	2.10	1.38	1.55
末子 7-12 歳	2.20	1.81	1.33	1.40
末子 13-18 歳	1.92	1.82	1.25	1.32
末子 19 歳以上	1.68	1.57	1.28	1.35

表4. 性による一元配置の分散分析の結果

	WFC			
	末子 0-6 歳	末子 7-12 歳	末子 13-18 歳	末子 19 歳以上
df	1	1	1	1
F 値	4.35	15.71	1.35	2.90
p	p<.05	p<.01	n. s.	p<.10

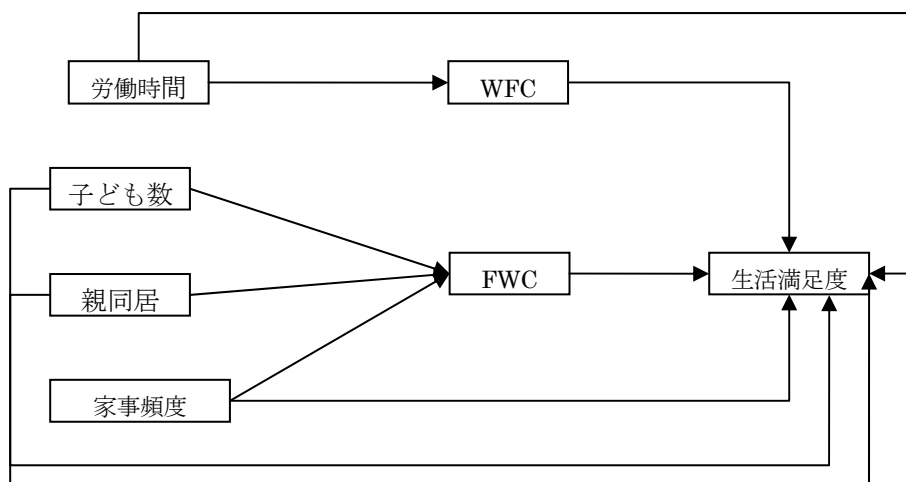
	FWC			
	末子 0-6 歳	末子 7-12 歳	末子 13-18 歳	末子 19 歳以上
df	1	1	1	1
F 値	6.23	0.90	1.93	2.08
p	p<.05	n. s.	n. s.	n. s.

4-3 WFC/FWC の規定要因および WFC/FWC と生活満足度の関連についてのパス解析

ここでは WFC/FWC の規定要因を明らかにすると同時に、WFC/FWC と生活満足度の関連についての分析を行なう。分析は男女別・ライフステージ別に行なう。

パス解析の分析モデルを、以下の図3に示す。

図3. パス解析の分析モデル



WFC、FWCの規定要因は、それぞれの領域における時間的プレッシャーである。WFCは「仕事のために家族との時間がとれない」という質問内容からも推察されるように、仕事の原因で家族生活に支障が生じる状態を示す。そのため仕事上の時間的プレッシャーがWFCの発生を左右していると考ええる。ゆえにWFCの規定要因としては、仕事上の時間的プレッシャーを示す労働時間を設定した。同様にFWCは「家族のために仕事の時間がとれない」という質問項目で尋ねられているように、家族が原因で職業生活に支障が生じる状態を指す。そのため家族生活上の時間的プレッシャーがFWCの発生を左右していると考ええる。ゆえにFWCの規定要因としては、家族生活上の時間的プレッシャーを示す、子ども数、親との同居（隣居を含む）、（男性の場合は本人、女性の場合は配偶者の）家事頻度を設定した。

WFC、FWCはそれぞれ生活満足度に関連していると考ええる。生活満足度には、WFC、FWCからのパスのほかに、WFC、FWCの規定要因である労働時間、子ども数、親との同居、家事頻度からのパスをひくことができる。

表5～表8は、ライフステージ別・性別のパス解析の結果である。

表5. パス解析の結果（末子0-6歳）

	男性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	0.985		0.975		3.473	
労働時間	0.000	0.282***			0.000	-0.095
子ども数			0.088	0.094+	-0.093	-0.117*
親との同居・隣居			-0.003	-0.002	0.009	0.006
本人家事頻度			0.030	0.146**	-0.003	-0.017
配偶者家事頻度						
WFC					-0.017	-0.031
FWC					-0.061	-0.069
n	388		398		375	
F	33.288***		4.048**		2.113+	
R ²	0.079		0.030		0.033	
Adj. R ²	0.077		0.023		0.018	

	女性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	1.136		1.571		3.214	
労働時間	0.000	0.445***			0.000	0.109
子ども数			-0.010	-0.009	-0.086	-0.113
親との同居・隣居			0.022	0.011	-0.139	-0.107
本人家事頻度						
配偶者家事頻度			0.001	0.002	0.006	0.033
WFC					-0.130	-0.230*
FWC					-0.092	-0.136+
n	156		165		152	
F	37.971***		0.010		2.562*	
R ²	0.198		0.000		0.096	
Adj. R ²	0.193		-0.018		0.058	

注：***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

表6. パス解析の結果 (末子 7-12 歳)

	男性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	1.318		1.327		3.299	
労働時間	0.000	0.183**			0.000	-0.018
子ども数			-0.045	-0.049	-0.052	-0.068
親との同居・隣居			0.024	0.016	0.018	0.015
本人家事頻度			0.011	0.062	-0.004	-0.026
配偶者家事頻度						
WFC					-0.077	-0.145+
FWC					-0.098	-0.118
n	235		244		223	
F	8.050**		0.452		2.057+	
R ²	0.033		0.006		0.054	
Adj. R ²	0.029		-0.007		0.028	

	女性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	1.234		1.584		2.922	
労働時間	0.000	0.297***			0.000	-0.019
子ども数			-0.017	-0.017	0.012	0.013
親との同居・隣居			-0.150	-0.101	0.102	0.070
本人家事頻度						
配偶者家事頻度			-0.013	-0.051	0.025	0.103
WFC					-0.140	-0.187*
FWC					-0.160	-0.166*
n	197		195		183	
F	18.827***		0.736		3.476**	
R ²	0.088		0.011		0.106	
Adj. R ²	0.083		-0.004		0.075	

注: ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

表7. パス解析の結果 (末子 13-18 歳)

	男性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	0.791		1.273		2.891	
労働時間	0.000	0.258***			0.000	0.017
子ども数			-0.085	-0.109+	-0.097	-0.110
親との同居・隣居			0.132	0.119+	0.101	0.080
本人家事頻度			0.013	0.093	-0.002	-0.015
配偶者家事頻度						
WFC					-0.049	-0.075
FWC					0.039	0.035
n	245		245		230	
F	17.322***		2.876*		0.800	
R ²	0.067		0.035		0.021	
Adj. R ²	0.063		0.023		-0.005	

表7. パス解析の結果・続き (末子 13-18 歳)

	女性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	1.170		1.317		2.565	
労働時間	0.000	0.331***			0.000	0.041
子ども数			0.010	0.010	0.081	0.080
親との同居・隣居			-0.039	-0.029	0.113	0.084
本人家事頻度						
配偶者家事頻度			0.000	0.000	0.005	0.025
WFC					-0.018	-0.027
FWC					-0.091	-0.090
n	223		225		207	
F	27.174***		0.068		1.048	
R ²	0.109		0.001		0.030	
Adj. R ²	0.105		-0.013		0.001	

注: ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

表8. パス解析の結果 (末子 19 歳以上)

	男性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	0.943		1.112		3.129	
労働時間	0.000	0.190***			0.000	-0.120*
子ども数			0.048	0.047	0.082	0.081
親との同居・隣居			0.101	0.072	0.042	0.031
本人家事頻度			0.003	0.021	0.003	0.016
配偶者家事頻度						
WFC					-0.110	-0.160*
FWC					-0.068	-0.070
n	407		406		370	
F	15.117***		1.091		4.403***	
R ²	0.036		0.008		0.068	
Adj. R ²	0.034		0.001		0.052	

	女性					
	WFC		FWC		生活満足度	
	b	β	b	β	b	β
(定数項)	1.324		1.428		3.276	
労働時間	0.000	0.136**			0.000	-0.072
子ども数			-0.051	-0.046	0.017	0.017
親との同居・隣居			0.223	0.144**	-0.010	-0.007
本人家事頻度						
配偶者家事頻度			-0.005	-0.022	-0.001	-0.004
WFC					-0.170	-0.233***
FWC					-0.116	-0.132*
n	390		374		354	
F	7.280**		2.785*		7.261***	
R ²	0.018		0.022		0.112	
Adj. R ²	0.016		0.014		0.096	

注: ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

表5より末子0-6歳ステージについてみると、男性・女性とも労働時間がWFCに正の効果をもっている。家族要因のFWCへの効果についてみると、男性は子ども数と本人の家事頻度がFWCに有意な正の効果を示している。女性はどの家族要因もFWCに有意な効果をもっておらず、回帰式自体も有意ではない。生活満足度への効果を見ると、男性では子ども数が負の直接効果をもっており、子ども数が多いと生活満足度が低下する傾向が読み取れる。WFC、FWCは男性の生活満足度には有意な効果をもっていない。女性については、WFC、FWCともに生活満足度に対して有意な効果がみられる。

表6より末子7-12歳ステージについてみると、男性・女性ともに労働時間がWFCに有意な正の効果をしめしている。家族要因（子ども数、親との同居、家事頻度）は、男性についても女性についてもFWCに有意な効果をもっていない。家族要因のFWCへの効果を検討した回帰式は、男性・女性ともに有意でない。生活満足度への効果については、男性はWFCが、女性はWFC、FWCの双方が有意な効果をもっている。WFC、FWCが高まると生活満足度が低くなる傾向が読み取れる。

表7は末子13-18歳ステージの分析結果を示している。WFCについては、男性・女性ともに労働時間が有意な正の効果をしめしている。FWCについては、男性についてのみ、子ども数が少ないとき、および親と同居しているときに高まる傾向がみられる。しかしFWCは男性の生活満足度には有意な効果をもっていない。同様に女性の生活満足度にも、WFC、FWCは有意な効果を示していない。仕事要因、家族要因、WFC、FWCの生活満足度に対する効果を検討した回帰式は、男性・女性ともに有意でない。

表8は、末子19歳以上のライフステージに関する分析結果である。労働時間は、男性・女性ともWFCに有意な正の効果をもっている。家族要因のFWCへの効果については、女性のみ親との同居が有意な正の効果を示している。生活満足度への効果を見ると、男性については、労働時間とWFCが有意な負の効果を示している。労働時間が長いほど、WFCが高いほど、生活満足度が低くなる傾向が読み取れる。女性については、WFCとFWCが有意な負の効果をもっており、WFC・FWCが高いほど、生活満足度が低くなる傾向がみられる。

5. 考察

5-1 仮説の検証

本稿の分析で得られた結果をまとめ、仮説の検証を行なう。

まず、WFC/FWCの発生頻度について検討する。全体としては、WFCのほうがFWCよりも発生頻度が高かった。これは、個人が職業役割と家族役割の双方の役割を担うとき、全般的にみて職業役割を優先する（せざるをえない）状況におかれていることを反映していると考えられる。職業役割と家族役割の双方から時間的プレッシャーがかかるとき、結果的には職業役割を優先せざるをえないために、（仕事のために）「家族との時間がとれない」と感じる頻度がより高くなるのだろう。

WFC/FWCの発生頻度を、それぞれ性別で比較すると、WFCは男性に高く、FWCは女性に高かった。これは職業役割への期待が男性に強く、家族役割への期待が女性に強いことを反映していると考えられる。強く期待されている領域（男性：職業、女性：家族）での役割遂行を優先せざるをえないために、他方の領域での役割遂行がさまたげられると感じる頻度が高くなるのだろう。仮説においては、育児期には仕事と家族の双方からの時間的プレッシャーは特に女性に強く、そのため育児期においてはWFC/FWCとも女性に高いと予想したが、仮説は支持されなかった。育児期においてもWFCは男

性に高く、FWC は女性に高かった。就学前の幼い子どもをもつ女性は仕事に比較的強くコミットしていると考えたが、そうした層においても女性は家族役割の遂行をより優先している。そして男性は職業役割の遂行をより優先しているようだ。

WFC/FWC のライフステージ別の発生頻度を比較すると、仮説で予想したとおり、WFC/FWC とも、男女ともに「末子 0-6 歳」のステージが最も高く、子どもが成長したライフステージにある人ほど、WFC/FWC の発生頻度は低くなる傾向がみられた。すなわち、子どもが小さい育児期は、男性にとっても女性にとっても、仕事と家族の双方からの時間的プレッシャーが強くなるライフステージであることがわかる。

次に WFC/FWC の規定要因について検討する。

男女ともにライフステージを通して、労働時間が長いほど WFC が高まる傾向がみられた。労働時間の回帰係数をみると、仮説で提示したとおり、子どもが小さいライフステージほど値が大きく、その傾向は特に女性で顕著である。この点について、すべてのライフステージを合併したデータを、男女別に、労働時間・ライフステージ、および労働時間とライフステージの交互作用項を投入した一般線形モデルで分析した。その結果労働時間とライフステージの交互作用項は男性・女性とも有意であった。特に女性においては、労働時間の WFC に対する効果は、幼い子どものいるライフステージほど大きい傾向をはっきりと読み取ることができた。また、男女を合併したデータ（ライフステージ別）に、労働時間・性別ダミー・労働時間と性別の交互作用項を投入して、性によって労働時間の効果が異なるかを、重回帰分析によって検討したが、どのライフステージにおいても性によって労働時間の WFC に対する効果が異なるという結果は得られなかった。

家族要因（子ども数、親との同居、家事頻度）は全体としてはあまり FWC との関連を示さなかった。特徴的であったのは、「末子 0-6 歳」の男性である。彼らにおいては、子ども数の多さと家事頻度の高さが FWC を高めていた。特に家事頻度については、回帰係数も比較的大きい。男性の家事遂行の水準の低さはしばしば指摘される場所であるが、幼い子どものいるライフステージでは家事の総量が多いため、妻ひとりでは家事を担いきれない状況がある。そのような家事にかかわらざるをえない状況に男性がおかれた場合には、それが FWC を高める結果になっている。また、「末子 13-18 歳」のステージでは、男性において子ども数が少ないとき、親と同居しているときに FWC が高まる傾向がみられた。子ども数の効果は、「末子 0-6 歳」のステージとは逆の方向を示している。この点については仮説的な解釈であるが、末子が中学生・高校生のライフステージで子ども数が多いことは、子ども同士の相互作用が増え、親が子どもに関わる必要性が相対的に低くなるために FWC は発生しにくくなるのではないか。それに対して、子ども数が少ない場合には何らかのかたちで親の関わりを必要とする度合いが高いために FWC が高まるのかもしれない。また「末子 19 歳以上」のステージでは、女性のみ親と同居している場合に FWC が高まる傾向もみられた。

最後に WFC/FWC と生活満足度との関連について検討する。仮説においては、WFC/FWC と生活満足度との関連は、子どもが小さいライフステージで強く、子どもの成長したライフステージでは関連が弱くなると予想したが、仮説は支持されなかった。

男性については、「末子 0-6 歳」ステージでは、WFC、FWC ともに生活満足度と有意な関連はみられない。このライフステージにある男性においては、子ども数のみが生活満足度に正の直接効果を示していた。「末子 7-12 歳」ステージでは、WFC が生活満足度と有意な負の関連を示し、「末子 13-18 歳」ステージでは、WFC、FWC ともに生活満足度とは有意な関連を示さない。「末子 19 歳以上」のステージでは、WFC が生活満足度と負の関連を示すと同時に、労働時間が生活満足度に負の直接効果

を示していた。

一方、女性については、「末子 0-6 歳」、「末子 7-12 歳」、「末子 19 歳以上」のステージで、WFC、FWC とともに生活満足度と有意な負の関連がみられた。

5-2 結論：WFC/FWC と生活満足度の関連のライフステージ・ジェンダーによる差異と共通性

こうした分析結果から、WFC/FWC と生活満足度との関連のライフステージ間の傾向について、男性と女性の共通点と相違点を、以下のようにまとめることができる。

まず男性と女性で共通にいえることは、WFC/FWC の生活満足度との関連は、「末子 7-12 歳」ステージで強く、「末子 13-18 歳」ステージでは弱いことである。

「末子 7-12 歳」ステージでは、女性は WFC、FWC とともに生活満足度と有意な負の関連がみられ、男性の WFC は生活満足度に有意な負の関連を示していた。また男性の FWC の生活満足度に対する効果も、統計的に有意ではないものの、他のステージに比べると比較的大きな回帰係数を示している。この背景には、このライフステージにおいては依然子どもに対する日常的なケアが必要とされているということと同時に、このライフステージ特有の家族の問題の複雑さがあると推察される。つまりこのライフステージでは、食事などの面で子どもに対する日常的なケアの必要性は依然高い。それと同時に、子どもは学齢期をむかえ、進学に関する事など、日常的なケアにとどまらない家族生活上の問題も生じてくる。そうした日常的なケアとは別の「家族の問題」に対しては、母親のみならず父親も関わらざるをえない状況があると思われる。

一方で「末子 13-18 歳」ステージでは、男性・女性ともに WFC/FWC と生活満足度には有意な関連がみられなかった。WFC/FWC、仕事・家族要因と生活満足度との関連を検討する回帰式は、男性・女性ともに有意ではなかった。これは、このライフステージにおいては、家族生活と職業生活の双方からの時間的プレッシャーをやりくりすることは、個人の生活の中心部分を占めるものではないことを示している。子どもがある程度育ちあがったこのステージにおいては、家族生活と職業生活との間の時間的バランスをとるという問題は、一時的に個人の生活の後景に退いている。

他方で、WFC/FWC と生活の質との関連のライフステージ間の傾向には、重要な性差もみられる。そしてその差異は、WFC/FWC とケア役割との結びつきが、性によって非対称であることによって生じているようだ。

女性の生活の質は、ケア役割の重さによって生じる WFC/FWC によって左右される。女性の生活の質は、末子が就学前や小学生で子どもに対するケアの必要性が高いライフステージでは、WFC/FWC と強い関連を示していた。また「末子 19 歳以上」のライフステージでは、親との同居が FWC を高め、それが生活満足度を低下させている傾向がみられた。つまりこのステージにおいては、年若い親のケアの必要性の高まりと、それによって生じる FWC が、女性の生活の質を左右する要因となっている。

他方で、男性の生活の質は、ケア役割とそれによって生じる WFC/FWC には影響を受けていないようだ。むしろ経済的役割の重さや余暇生活の一部としての家族生活が職業生活と相容れないことが、男性の生活の質を左右している可能性が高い。男性においては、「末子 0-6 歳」のステージにおいては、家事頻度の高さは FWC を高めていたが、FWC が生活満足度を低下させている傾向はみられなかった。またこのステージにおいては、子ども数の多さが生活満足度を直接低下させる傾向がみられた。子ども数が多いことは職業生活と家族生活の時間的やりくりを困難にすることとは別の意味で、生活満足度を低下させていることになる。それが何であるかは本稿の分析では十分に明らかにしえ

ないが、自分の余暇時間の圧迫、子育ての経済的負担などが、男性の生活満足度を低下させている可能性がある。

また「末子 19 歳以上」のステージでは、男性の WFC の高さが生活満足度を低めると同時に、労働時間の長さも直接に生活満足度を低下させていた。これはこのステージの男性にとって、仕事の重要性が相対的に低下しているために、仕事に長時間拘束されることが家族生活のさまたげとして認識されるためであると考えられる。このライフステージにある男性は、生活の中心を仕事から家族生活に移行させつつあり、労働時間の長さは、スムーズな移行をさまたげるものにとらえられているのではないか。つまりこのライフステージの男性にとっての「(仕事のために) 家族との時間がとれない」の「家族」とは、そこで男性自身がケア役割を遂行することを意味しているのではなく、むしろ余暇生活としての家族を意味していると推察される。

以上、WFC/FWC の発生頻度、規定要因、生活満足度との関連について、ライフステージと性差に注目して分析を行なった。WFC/FWC の発生頻度、規定要因、生活満足度との関連はライフステージによって異なっており、さらに同じライフステージにおいても性によって異なっている。その差異は、ケア役割の重さのライフステージ間の差異と、ケア役割遂行期待の性差によって形成されている。

【参考文献】

- 裴智恵, 2005, 「共働き男性における仕事と家族の両立—育児期の父親の役割葛藤をめぐって—」第 78 回日本社会学会大会報告レジュメ.
- Frone, Michael R., 2003, “Work-family balance.” James Campbell Quick and Lois E. Tetrick eds., *Handbook of Occupational Health Psychology*, Washington DC: American Psychological Association, 143-162.
- Frone, Michael R., Marcia Russell, and M. Lynne Cooper, 1992, “Antecedents and outcomes of work-family conflict: testing a model of the work-family interface” *Journal of Applied Psychology*, 77(1): 65-78.
- Greenhaus, Jeffrey H., and Nicholas J. Beutell, 1985, “Sources of conflict between work and family roles,” *Academy of Management Review*, 10, 76-88.
- 金井篤子, 2002, 「ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスへの影響に関する心理的プロセスの検討」『産業・組織心理学研究』15(2): 107-122.
- 杉野勇, 2004, 「4 家庭生活と職業生活の相互影響関係」『中年女性のライフスタイルと危機的移行—第一次パネル調査報告書—』お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム プロジェクト 4 平成 15 年度研究成果報告書, 68-75.